

中国の留学生と私—私にとっての日中友好—

田代 康 則

こんにちは。今日は大変お忙しい中、私の拙い話を聞きに来て下さり、大変ありがとうございます。

今年（2004年）は、池田先生が初訪中されて満30周年という佳節に当たります。今日は、「中国の留学生と私—私にとっての日中友好—」と題して話させていただきます。

今日の内容は、決して学術的な内容ではございません。あくまで、池田先生が命をかけて切り開かれた日中友好三十数年の歴史の中で、私自身が関わったことを通して、わずかかもしれませんが日中友好についてお話できればと思っております。したがって、留学生の話だけということではなく、私自身の中国との関係を交えてお話ししたいと思います。

1. 留学生のための再入寮

1975（昭和50）年4月7日の夕方、池田先生が滝山南寮の入寮式にご出席されました。これは突然のことでした。先生のマイクも用意されておらず、ばたばたしていました。先生がお話されている横に私が座っている写真がありますが、実は、私がスタンドマイクを斜めにして持っているところが写っています。それほど、先生の訪問が急だったのです。その中で、先生は次のようなお話をされました。「中日友好のため、中国の未来の指導者6人のために、最も記念すべき歴史的な日として祝福に参りました。諸君に申し上げたいことは、留学生6人を軸として世世代々の友人となって、一生涯、手を結んで、美しい、尊い友情を作ってください、これほどの喜びはありません」と。先生は、中国の留学生と創大生の友情を永遠に作っていくよう、大きな期待を寄せられてお話をされました。池田先生としては、生活を共にする寮生に直接、話しておかなければならないという烈烈たる気迫であったと思います。

私はこの時、大学院1年生でしたが、4月から再び滝山寮で生活することになりました。それは、戦後、初めて公式に中国からの留学生を創価大学に迎えることになったためです。男子4人、女子2人いたんですけども、男子4人は滝山寮へ、そして2人ずつ2部屋に別れました。また、女子2人は朝風寮に入ることになりました。

当時、中国との国交が回復したとはいえ、中国はまだ未知の国でありまして、その中国の留学生を迎えるということで、大学全体が非常に緊張しておりました。現在、創価大学の学長である若江正三先生は、当時、国際部長、別科長を務めておられました。若江学長や石川恵子別科長、あるいは、中国語の山口和子先生といった方々が、教育面でのカリキュラムの準備に必死にあたっておられたと思います。今の別科（日本語研修課程）の出発は、その中国の留学生を迎えるために作られたようなものなのです。若江国際部長は別科を作るためにいくつかの大学を訪問するなど奔走されたと同っています。

私はすでに寮を出てアパート暮らしをしておりました。突然、当時の篠原誠学生部長から連絡がありまして、「寮にもう1度入ってこないか？」と言われたんです。大学院生になってか

ら、今さら滝山寮で暮らすというのは、地獄のような生活になるわけですけども（笑）。そこで、「何故ですか？」と聞きますと、「実は、中国から留学生が入ってくるんだ。それで、誰か先輩がいて、留学生の面倒を見てもらわないと何が起こるか分からないから。とにかく、一緒に暮らしてくれないか」と言うんです。

そして、選ばれたのは私と1期生の井上聖志さんでした。井上さんは1期生ですが、留学しておりまして、卒業が1年遅れていました。では、なぜ、その2人が選ばれたかと言いますと、とにかく中国に関する経験がある。というのは、私は大学3年生の時に中国へ行ったんです。その年は、国交回復の翌年でありました。創大生として中国に行ったことがあったのは、私が、2人目だったのですが、もう一人の大倉鎮信さんは既に卒業した後でした。一方、井上さんは、中国語ができました。そういうわけで、私と井上さんの2人が選ばれたというわけなんです。

私たち2人は滝山寮に入りました。私は滝山中寮だったんですが、その部屋には2人の留学生が入り、残りの2人は滝山東寮の部屋に入りました。一方、女性の留学生は、朝風寮に入りました。1975（昭和50）年4月のことです。

2. 初の中国訪問

では、この時から7年前に話を戻しまして、「なぜ、私が中国に興味を持つようになったのか」についてお話ししたいと思います。

7年前の1968（昭和43）年9月8日は、池田先生が第11回学生部総会において、歴史的な「日中国交正常化提言」をされた日です。この時、私は創価高校の1年生であり、本来ならば、高校生は学生部総会に参加できません。池田先生は提言2日前の9月6日、創価高校のグラウンド開きに来られました。グラウンド開きを終えて帰られる時に、先生から「実は、明後日、大事な講演をするから、学園生の代表も参加させてあげよう」という話があったそうです。そういうことで、急遽、9月8日の学生部総会に創価高校の代表が何名か参加させていただきました。私はその代表の一人に選ばれて、学生部総会に参加することができたのです。

学生部総会での講演は1時間以上にわたるものでした。その講演の詳細は、『新・人間革命』の「金の橋」の章に書かれております。高校生であった私にとって、講演内容は非常に難しいものでしたが、「中国と国交を正常化すべきである」という提言は、高校生の私にも大変ショッキングな提言でした。当時、マスコミは「中国は社会主義の国」「文化大革命の混乱が続いている」「権力闘争が激しい」といったマイナスイメージの報道をしていました。中国に対して、「ちょっと恐いな」という雰囲気があったのです。その講演の要点としては、第1に「中国の存在を正式に承認し、国交を正常化すること」、第2に「国連における正当な地位を回復すること」、第3に「経済的、文化的な交流を推進していくこと」の3点でありました。

そういう状況でしたから、私は「すごい提言だな」と驚きました。その提言後、「池田会長は共産主義の手先か」などとずい分批判されたそうです。まさに、当時、池田先生が「日中国交正常化提言」をされたことは、命がけの発言であったわけです。そういった中で、先生はあくまでも民衆次元から中国、世界との関わりを考えられ、この提言をされたと思います。

高校生だった私は、その講演を聞いた後、「中国へ行ってみよう」と思うようになりました。しかし、当時、中国へ行くということは100パーセント不可能でした。ですから、先生の提言からわずか4年後に、日中の国交が回復するとは、当時、誰も予想していなかったと思います。そういう中で、私は、「中国と仲良くしていこう」という先生の提言が心の中に深く刻まれていたように思います。

私が大学2年生の時、中国との国交が回復しました。それでも、中国に行くというのはなかなかできませんでした。そういう中で、中国研究会初代部長だった1期生の大倉さんは、「日中友好協会」が日中友好学生訪中団の参加者を募集していたので、そこへ応募して、創大生として初めて中国の地を踏みました。1973年の春休みでした。私はその話を聞きつけまして、大倉さんに「どうすれば私も中国に行けるかな」と尋ねました。すると、「日中友好協会の勉強会に参加したり、イベントとかの手伝いをしないといけない」と言われましたので、私は春から夏にかけて、勉強会があるといえは東京の神田まで行きました。そして、1973年8月の学生訪中団の一員になることができました。それで、中国を初訪問できたのです。

その訪問とは約3週間の旅行でした。当時、東京から北京に行く直行便はなく、香港の九龍駅から列車に乗って国境の街へ行き、そこから国境の鉄橋を渡りました。その鉄橋に歩道があり、そこを歩いて中国の地に入りました。中国の国境には、人民解放軍の服を着た兵士が並んで立っておりました。国境付近では緊張感がありました。そして、深圳に入りました。深圳は今とは全く違います。当時は、家もぼつぼつとしかありませんし、静かな田園地帯でした。そこから、中国に入っていました。

中国に入った後、深圳から広州へ、そして広州から飛行機に乗り杭州へ、そして、列車で上海へ、上海から飛行機で北京へ、北京から列車で内陸部をずっと何日もかけて走り、長沙で一泊し広州へと戻るといった旅路でした。旅行といっても、もちろん訪中団ですから行く先々で勉強でした。私は今も学生時代に中国へ行ったということが、自分の人生にとって1つの大きな出来事であったと思っております。

とにかく、中国の体制は日本と非常に違いました。日本は資本主義、自由主義の国でありますけれども、中国は社会主義の国であり、国の構造が全く違うんです。その違いというものについて考えさせられることが多々ありました。

私たち訪中団は全国から学生が集ってきた団体であり、書道を勉強している人もいれば、完全な社会主義の思想を持つ人もいます。そういう中でいろんな議論をしました。ある時、原爆の話になりました。私と中央大学の学生、彼も創価学会のメンバーでありましたが、2人で「中国は原爆を持たないほうがいいんじゃないか。原爆を持っていたら、何かあった時に使う必要が出てくるかもしれないし、原爆を持つべきじゃない」と主張したんです。ところが、一緒に行った連中は、「何を言っているんだ。中国は核を持ってもいいんだ。ソ連の核は汚い。しかし、中国の核はきれいなんだ」というふうにまじめな顔で言うんです(笑)。僕らは「原爆にきれいも汚いもないだろ」と言い返しましたけれども。私たち学生訪中団60名に付き添っていた中日友好協会のスタッフだと思いますが、通訳してくれる人が3、4人いました。ある通訳の方は、「原爆を持つことを理解してほしい。私たちは絶対に先には原爆を使わない。しかし、ソ連がいつ攻めてくるかわからないんです」と語っていましたが、それほど、当時は中国とソ連の関係は緊迫していました。「だから、先には原爆を使わないけれども、もし、ソ連が攻めてきた時には、私たちは戦う」という話をするんです。

また、私たちが北京の街をまわった時、ある商店がありまして、そこに入ると、「今からご案内します」と言われました。すると、お店の後ろ側のドアがパッと開くんです。そこには階段があって、そこを降りていくと、地下街がずっと続いているんです。「これは何ですか」と聞いたら、「ソ連が攻めてきたら、あるいは、ソ連が原爆を発射したら全北京市民が10分以内にこの地下壕に逃げ込むことができるんだ」と言うんです。本当に緊迫しているんです。日本人には、この緊張感はず分らないです。

そういう中での議論ですから、なかなか私も大変でした。しかし、私ともう1人のメンバーに対して、中国の人から「こういう状況を分かってほしい」という必死さが心に伝わってきたことは忘れることができません。

それから、北京の人民大会堂で中日友好協会の張香山副会長にお会いすることができました。そして、私たちに挨拶をしてくださいました。その時、張副会長が言われた言葉をはっきり覚えております。「今日、日本から学生の皆さんが来て下さったことは、私たちにとって大変ありがたいことです。ただ、中国は皆さんに中国の共産主義、社会主義の思想を持ってほしいとか、そういうようなことは思っておりません」と。私はそれを聞いて安心したんです。続けて「私は皆さんに中国人と同じ思想を持ってほしいとは全然思っていない。ただ、中日友好という1点だけに賛同してくれれば、私たちは皆さんを歓迎致します」というふうに言われたんです。私は、その言葉が印象に残りまして、「中国人の考えは本当に広いな。私たちは日中友好を推進したいんだ。その気持ちは誰にも負けない。その1点があれば、副会長は歓迎すると言っている。本当にありがたいな」と感じました。

かなりの強行スケジュールで、いろいろな所をまわりました。朝6時頃に起きて、7時頃から活動し始めるんです。見学の連続で、夜9時頃に帰ってきて、一日の活動について総括するんです。その総括に2、3時間はかかりました。寝る時間は夜中の1、2時で。また翌日は朝6時頃に起きると。そういう日々が続いて、私は何とか体力があったのでそのスケジュールをこなせましたけれども、途中、一緒に来ていた学生が何人か倒れました。ある人は上海で歩いている時に、階段でばったり倒れ、顔を打って歯を折り、そのまま入院しました。また、別の人は、北京に着いた頃、肺炎になって、そのまま入院しました。入院すると、そのまま通訳の方も病院に残りました。だから、訪中団の通訳の方は3、4人いたのですが、最後には1、2人になってしまいました。それほど強行スケジュールだったのです。

そういう中で、私は日本が中国に対して行った残虐行為について、通訳の方に率直にお詫びしました。「過去において、日本が中国に対してひどいことをしてしまい、本当に申し訳なかった」と。通訳の方は、「私たちは、もうそのことは忘れず。しかし、皆さんは、そのことを忘れないで下さい」と言われました。私は、その言葉が非常に印象に残りました。しかし、「中国の人が忘れず」と言ったとしても、忘れられないことです。自分の親が、家族が、何らかの形で殺されたとかいうことは、忘れようとしても忘れられません。しかし、「私たちは忘れず」と言うんです。「ただし、皆さんは忘れないでほしい」と。

3. 創立者と中国の留学生

話を戻しまして、池田先生は滝山寮の入寮式に出られた後、滝山寮の応接室に中国の留学生を呼んで、懇談されました。そして、先生は自ら滝山寮から栄光門、そして校内を案内されました。その後も、池田先生は来学の度に、留学生を呼んで懇談をして下さいました。先生は、留学生たちの保証人、身元引受人の責任を果たされていたんじゃないかなと思います。

実は、留学生はその1年前に日本に来ていたんです。ある大学のある教授のところ、個人的に言ったら変ですけども、大学に来たのではなくて、中国を専門としておられる教授のところ、預けられていたんです。その教授から日本語を教わったり、あるいは、日本文化等を教えてもらっていたのではないのでしょうか。しかし、中国の留学生は国費ですから、いつまでもそこにいるわけにはいきません。当然、大使館としては「国立の大学に留学させたい」と思

っていました。当初は、国立の大学に留学する予定だったようですが、結局、受け入れられないということになったのです。それで、中国大使館も困っていたんです。

池田先生は大使館関係者と懇談している折に、このような話を聞き「それでは、創価大学で受け入れましょう」と言われて、留学生の受け入れを決断されました。先生が、「私が保証人になって迎えましょう」と言われたので、大使館関係者は大変喜んでいました。

先程も申し上げましたけれども、先生は、わざわざ留学生を迎えるために別科日本語研修課程というコースを考えられたのです。6人の留学生のために作ったんです。その後、大勢の留学生がそのコースで学んでいます。

滝山寮に先生自らが訪問して、「生活に支障がないように」ということで入寮式に参加され、懇談をされたということです。それほど、池田先生は中国の留学生を迎え入れることを重要視しておられたということです。

そして、いよいよ、留学生との生活が始まりました。彼らは「毎日、朝起きたら体操をする」と言うんです。中国体操というものです。朝7時頃に起きて、滝山寮の屋上で体操するんです。私たちも教えてもらいました。一緒に体操した後、食事をして彼らは大学へ行きます。彼らは本当に勉強熱心でした。帰ってきた後も勉強しておりました。また、毎週土曜日になると、彼ら6人は文系A棟で勉強会をやっておりました。「何をやっているの?」と聞くと、「勉強会をやっている」と。「何を勉強しているの?」と聞くと、マルクスの著書とか、エンゲルスの著書を勉強しているとのことでした。

4. 中国の留学生の創大生活

毎年、夏に滝山祭が行われていました。その滝山祭で、留学生は寮生と一緒に水餃子を作り、それを模擬店で売ろうということになりました。千個位は作ったんじゃないでしょうか。手が真っ赤になるまで餃子の皮を作り、それを滝山祭の時に売ったんです。それは大好評で、大変美味しく、池田先生にも食べていただきました。そういう共同作業を通して、不思議と心が通うようになりました。その辺まではよかったのですが、その後がまずかったのです。それは、滝山祭が終わり、打ち上げのコンパをやりました。そのような中、留学生にお酒を無理やり勧めた寮生がいたようです。その時、私は寮にいないで、寮に帰ると大騒ぎになっていました。私の部屋には、留学生6人の中で最年長の方がいて、私が部屋に戻ると、彼はひどい剣幕で私に言い寄って来るんですね。「日本人は一体、何を考えているんだ。日本人は酒を飲まないで、本当の話ができないのか。こんなことをする集団はよくない」と。私はなだめるのに必死でした。「彼らは悪気はない。嫌な思いをさせようとか、そういうことではないんだよ。ただ、日本の学生はお酒を飲むと、そういうことをしてしまうんだよ。よくないけれども、これは文化の一面と思って下さい」と言いました。こういう問題もありましたが、多くの学生が留学生と仲良く生活していました。

留学生の内の1人は、現在、駐日中国大使館公使です。その程永華公使が公使就任の挨拶に学会本部を訪問された時に、当時の寮生のメンバーでお出迎えをしました。程永華さんは当時の寮生に会うと、「心が学生時代に戻って懐かしいです」と話されておりました。やはり、若い時代の付き合いというのは大事だなと感じた次第です。

当時、彼らは細かいところまで大使館と連携を取りながら生活していました。例えば、経済学を教えられていた福島勝彦先生、今は短大の学長ですが、福島先生は校内の教員宿舎に住んでおられました。ある時、福島先生が留学生を家に招待しました。ところが、滝山寮から1、

2分ほどの教員宿舎に行くということを大使館に許可をもらわなければならなかったんです。「許可を取ってから行った」という話を聞いたことがあります。

また、創価大学には、ロンドン喫茶という喫茶店があります。今では笑い話ですが、コーヒーというのはアメリカ帝国主義のものだということで、大使館から禁止されていたんです(笑)。彼らはコーヒーを一切飲まなかった。ロンドンには一度も行かなかったんです。彼らはいろんな制約がある中で生活をしておりましたが、心と心は通じ合っていたのかなと思っております。

中国の留学生と創大生の関係が親密になっていきました。彼らは、中国研究会のメンバーに中国語を教えたり、今の中国研究会のクラブハウスに出入りしたりと、2年目に入ってから交流が多くなっていきました。私は2年目で寮を出まして、留学生と接する機会が少なくなってしまいました。2年目に入ると、勉強も非常に熱が入る一方、食生活に馴染めず、体調を崩す留学生が出てきました。私は寮を出てしまっていたので、あとで聞いた話ですけれども。

当時、中国では下放運動、いわゆる中国の青年は高校を出るとみんな地方へ派遣され、そこで労働をしながら学ぶという運動がありました。中国研究会の顧問であった山口先生が「では、留学生と創大生との共同で、農場を作ったらどうか」と提案されました。そこで、農業の経験のある人を学内で探していたら、関順也先生がおられました。関先生は、私のゼミの先生でもあったんですが、実家で農業をやっていたんです。農業の経験があるということで、関先生にお願いをして、今の東京富士美術館の辺りがこんもりとした丘だったんですが、その土地を借りて開墾し、畑を作ったんです。これは大変な作業だったようで、今も、その模様のビデオが残っています。授業が終わると、鍬とか鎌とか持って畑へ行くんです。2年目の1976(昭和51)年4月29日からその作業を始めました。

約2ヵ月後の6月25日、そこで初めて採れた作物を「留学生と創大生と一緒に育てた作物です」と池田先生にお届けしました。その翌日、池田先生が畑を視察され、畑を作った留学生と中国研究会の学生に対していろいろなお話をされました。また、先生はその場で、学生が用意していた板に「日中友誼農場」と墨で書かれ、それを中国研究会におくられたのです。現在、それは創価教育研究センターに保存してありますけれども、その場で板を斜めにして書かれたので、墨が垂れている様子が残っています。日中の学生が共同で作った畑を「日中友誼農場」と命名して下さったのです。先生は「日中の永遠の友好を願い、この農場を『日中友誼農場』と命名しよう」と言われました。

また、先生は、「ここで採れた作物を、秋になったらみんなで一緒に食べよう」と提案されました。それが実現したのがその年の11月5日に開催された「第1回月見の宴」でした。この時は、場所は畑ではなくて、万葉の家でした。先生は、「今は、小さな会合のように見えるけれども、20年、30年先には、ここにいる皆さんが日中友好の大きな架け橋になっていくことは間違いない。留学生と創大生は、永遠に兄弟の路線を歩みなさい」と話されました。先生は20年、30年先を見越して手を打たれたのだと思っております。

池田先生は「月見の宴」に来られたのですが、その日は残念ながら月は見えなかったんです。しかし、「皆さんの清らかなる心の月を見るほうが尊いし、ずっとうれしい。中国の友達も一緒に参加して下さい。中国の政治問題を話すつもりはないけれども、毛主席、周恩来総理の死後、政治の面が大変だ」と。ちょうど1976年11月ですから、周総理も毛主席も亡くなられていました。周総理が亡くなられた時、留学生は寮で泣いていたそうです。中国の周恩来総理という人は、本当に中国の人たちに尊敬されていたのでしょうか。

池田先生は、「政治の変動があっても、留学生とのつながりは完璧であり、距離的にも地理的

にも、未来永遠に兄弟の路線を歩んでいくことは間違いないし、この路線を先駆を切って歩んでいかれるのが中国研究会の皆さんであると信じています。中国のますますの発展と、創大の中国研究会の皆さんの健康と成長を心からお祈りし、今日は時間の許す限り一緒にさせていただきます」と話されております。

当時、文化大革命があり、四人組の逮捕など、中国がどうなっていくのか分からなかった時期です。しかし先生は、「政治のレベルでのいろんな変動、変化があっても、中国の留学生と創大生との人間関係は完璧だ。永遠に兄弟の路線を歩んでいくんだよ」と話されております。池田先生がよく言われたのは、「とにかく留学生を大事にするんだ」ということでした。「日本人が海外の大学へ留学することも大事だし、海外から来た留学生を大事することも大事です。将来、必ず心の通じ合ったメンバーは、時代の変化がどうなったとしても、その心と心のつながりは変わらない」ということを重要視されていたのではないかと思います。また、先生は、「昨日から中国の留学生も一緒に準備を進めていたのも分かっています。自分たちで作った作物、それを、自分たちで料理して下さい、胸の詰まる思いです。遠慮なく頂戴します」と言われました。餃子を作ったり、あるいは、採れた作物で作った料理を池田先生にお出ししました。

5. 日中友好のかけ橋に

それから話は変わりますが、皆さんご存知のように、「周桜」は池田先生が周総理に会われた時、周総理が若き日に「桜の咲く頃に日本を発ちました」と話されたことに対し、先生は「是非また、桜の咲く頃、日本に来て下さい」と。周総理は「願望はありますが、実現は無理でしょう」というやり取りがあったのです。先生は周総理の来日を願望して、留学生6名の手で「周桜」を植樹しました。1975（昭和50）年11月の創大祭の時です。現在、「周桜」が見事に成長し、毎年素晴らしい花を咲かせ、そこに多くの人たちが周総理と池田先生の心の交流を偲びながら、日中友好の決意を固めるという場所になっていると思います。

また、もう1つに「周夫婦桜」が平安の庭にあります。周総理は来日できなかつたけれども、周総理の奥様である鄧穎超先生が1979（昭和54）年4月に来日されました。池田先生は鄧穎超女史がいらっしゃるということを記念して、「周恩来桜」「鄧穎超桜」の2本の「周夫婦桜」を植樹されました。

鄧穎超先生が池田先生とお会いされたのは4月12日でした。その時、東京の桜は全て散っていましたが、池田先生は「何とか鄧穎超先生に桜を見てもらいたい」と言われました。私はその時、大学を卒業して池田先生の秘書室に勤めておりました。先生が「何とか桜を見せてあげたい」ということで、桜を探しました。桜前線は北の方へいっておりました。すると、「東北に桜が咲いています」と連絡があり、それを送ってもらい、先輩と私で桜を赤坂の迎賓館に持って行き、鄧穎超先生と会見される場所にその桜の木を生けたのです。鄧穎超先生も非常に喜んでおられたそうです。その桜の花の前で、同行の方々と何度も記念撮影をされたあとで伺いました。

このように、創価大学へ国費で初めて来た留学生は6名でした。次の留学生は2名、その次は4名でした。そして、時代がどんどん変わって、今では私費で中国の留学生が沢山留学されています。また、創価大学からもたくさんの学生が中国に留学しています。「金の橋」というのは「壊れることのない橋」という意味だと私は思います。創業者から「朽ちない『金の橋』、

日中友好の『金の橋』を作っていこう。強固にしていこう」という話もありました。今では中国から大勢の人が創価大学で学び、また、創価大学の学生も中国へ留学し、その後も中国で仕事をされている方がたくさんおります。池田先生が話された「20年後、30年後には、皆さんが日中友好の大きな架け橋になっていくことは間違いない。留学生と創大生は、永遠に兄弟の路線を歩みなさい」との言葉が現実になっております。

1期の留学生6名、程永華さんは中国大使館の公使です。滕安軍さん、李冬萍さんは中国大使館の参事官。許金平さんは中日友好協会の秘書長。40年前であれば、孫平化さんです。劉子敬さんは中日友好協会の理事。李佩さんは、後に劉子敬さんと結婚されて、中日友好協会に勤務されておりましたが、今はそこを出て、日本のトラベル会社の北京代表ということで日中の旅行関係で活躍されております。その後、本学に留学された王偉さんは中国社会科学院の日本研究所の社会文化室主任、程建林さんは国家計画委員会局長です。このように、皆さんがそれぞれの立場で活躍をされております。また、池田先生とお客様との対談の際、中国語の通訳をされている洲崎周一さんも中国研究会の中心者の一人でありました。最初に中国へ行った大倉さんは、日中の貿易関係の商事会社へ勤め長く中国に滞在しておりました。

池田先生はどんなに忙しくても中国の交換教員の先生方に御挨拶をされます。また、私達に「大事にしてください」という話をされます。私たち創大関係者は、何がどう変わっても、私たちは中国の留学生と一緒に暮らした、同じ釜の飯を食べたという思いで、いろいろ状況の変化はあるでしょうけれども、日中友好という根本精神だけは失ってはならないという気持ちを継承して参りたいと思っております。池田先生は学生の前で「日中友好は私の遺言だ」と言われたこともあります。先人の築いた日中友好を永遠にわたって築いていきたいと思っております。

以上で、私の拙い体験の話を終りたいと思っております。ご清聴ありがとうございました（大拍手）。

（本稿は、2004年6月16日の講演に加筆訂正したものです。）